

筑豊地区の園における自然体験活動の実施実態について

— 保育者へのアンケート調査より —

高木 義栄 堀田 亮 立石 力斗 垂見 直樹

橋本 翼 上田 浩平 原口 喜充

The Implementation Status of Nature Experience Activities in Childcare Sites in the Chikuho Area

—According to questionnaire survey for childcare workers—

Yoshihide Takaki Ryo Hotta Rikito Tateishi Naoki Tarumi
Tsubasa Hashimoto Kohei Ueda Hisami Haraguchi

Abstract

Questionnaire survey about the implementation status of nature experience activities (NEAs) was performed for childcare workers in the Chikuho area. Seventy percent or more of childcare workers who replied implemented NEAs more than once a week or several times for one month. Although there were no significant correlations between each attribute of childcare worker and frequency of NEAs, the tendency that older childcare workers implemented at high frequency was seen. The implement ratios of activities about creature and playing in the mud were high, on the other hand, those of animal rearing and scientific play were low. Besides, there were significant correlations between the length of service of childcare workers and the implement ratios of plant cultivation and playing in the mud, the implement ratios of them were low in the childcare workers with less than one year in length of service. It is a future problem to clarify the difference between cities and districts, characteristic every area and relationship between growth of children and NEAs by investigating in more areas.

Key words: Chikuho area, childcare workers, nature experience activities (NEAs)

1. はじめに

大正15年の「幼稚園令」において、初めて自然とのかかわりが保育内容として公的に評価されて¹⁾以降、子どもと自然とのかかわりは保育において重要視されてきた。このことは幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における環境領

域の内容 12 項目のうち 4 項目が自然に関係した内容となっている²⁾ ことから明らかである。また、自然体験が子どもの育ちに与える影響について、道徳感・正義感の充実といった精神面の成長³⁾、運動能力・体力の向上⁴⁾、生きる力の基礎となる心情・意欲・態度の修得⁵⁾など、様々な報告がなされている。

このような状況の中、井上&無藤(2007)⁶⁾は、東京都と兵庫県の保育現場における自然体験活動(Nature Experience Activities; 以下、NEAs)の実施実態について質問紙調査を行い、地域、設置者(公立・私立)、保育所と幼稚園の間に実施内容とその頻度に違いがあることを示している。また、東京都と神奈川県の子園(宮下&宮下 2010)⁷⁾および保育所(宮下&宮下 2011)⁸⁾を対象にした質問紙調査によって、これらの地域での保育者の自然現象に対する意識・自然体験学習の実施の有無・実施状況と時期・8 領域(植物、動物、地質、化学、気象、天文、物理、その他)に分けた活動内容など、保育現場における NEAs の実施実態が明らかにされている。しかし、保育現場での実施実態の調査はまだ少ない。また、上記の研究では結果は園単位で集計されているため保育者による違いが反映されておらず、年齢層や保育者歴といった保育者の属性との関連も不明である。

本研究では、2022 年度から筆者らが行っている、非都市部の一地方における子どもの発達を縦断的に調べる研究の一環として、筑豊地方の保育者を対象とした質問紙調査を通して、保育者単位での NEAs の実施実態を明らかにするとともに、保育者の属性と NEAs の実施実態との関連を調査することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象、調査時期および調査方法

福岡県筑豊地方にある保育施設(認可保育所、幼稚園、認定こども園)に勤務する保育者を対象とした。ウェブ調査による横断研究とし、ウェブ調査には Google Form を用いた。研究概要とウェブ調査用 QR コードを記載した、調査に関する用紙を各園の担当者経由で保育者へ配布し、調査に協力する意思がある場合に調査画面にアクセスするように依頼した。調査に関する用紙の送付は、2023 年 2 月から 3 月にかけて直接訪問あるいは郵送にて行った。福岡県筑豊地方の 142 の保育施設に対して配布し、Google Form により 43 施設(回収率 30.3%)の保育者 211 名の回答が得られた。211 名分の回答のうち、記入漏れなどの欠損データがあるものを除き、167 名分の回答について集計・解析した。

(2) 対象者の属性

調査対象者の属性として、①所属する園名、②年齢、③立場(園長・主任・担任・副担任・フリー・その他)、④保育者としての勤務年数(保育者歴)、⑤現在の職場での勤務年数(勤続年数)、について尋ねた。所属する園名については、本研究では園別の解析は行っていないが、所属園による影響がないか把握するために質問した。

年齢構成は、20-24 歳が 15 名(9.0%)、25-29 歳が 25 名(14.9%)、30-34 歳が 20 名(12.0%)、35-39 歳が 21 名(12.6%)、40-44 歳が 21 名(12.6%)、45-49 歳が 18 名

(10.8%)、50—54歳が24名(14.3%)、55—59歳が9名(5.4%)、60歳以上が14名(8.4%)であった。

立場は、園長が7名(4.2%)、主任が17名(10.2%)、担任が74名(44.3%)、副担任が28名(16.8%)、フリーが34名(20.3%)、その他が7名(4.2%)であった。

保育者歴は、1年未満が6名(3.6%)、1年以上3年未満が8名(4.8%)、3年以上5年未満が12名(7.2%)、5年以上10年未満が40名(23.9%)、10年以上20年未満が52名(31.1%)、20年以上30年未満が38名(22.8%)、30年以上が11名(6.6%)であった。

勤続年数は、1年未満が32名(19.1%)、1年以上3年未満が26名(15.6%)、3年以上5年未満が28名(16.8%)、5年以上10年未満が41名(24.5%)、10年以上20年未満が23名(13.8%)、20年以上30年未満が13名(7.8%)、30年以上が4名(2.4%)であった。

(3) 質問項目

1) NEAsの頻度

対象者に対して、「担当クラスにおける自然に関わる活動を実施する回数はどのくらいか」を質問した。質問にあたって“自然に関わる活動”とは、五感を使って直接的に触れる活動全般であることや自然のものを使った遊び・自然の中で行う活動・園内での活動を含むことを具体例とともに明記した。井上&無藤(2007)⁶⁾では活動の頻度において7段階の回答を採用しているが、本研究では回答時間をなるべく短くして回収率を上げるため、回答は「週1回以上」・「1か月に数回程度」・「数か月に1回程度」・「年1回以下」・「まったくしない/したことがない」の5段階とし、これらから一番近いものを選ぶようにした。

2) 実施しているNEAsの内容

対象者に対して、「担当クラスにおいて、自然に関わる活動について実施している活動は何か」を質問した。質問の選択肢は、「観察を伴う散歩」・「虫捕り」・「植物採集(葉・花・実など)」・「植物を利用した遊び(ままごと、ササ船、ピーピー豆の笛づくりなど)」・「動物の飼育(主に子ども達が世話するもの)」・「植物の栽培(主に子ども達が世話するもの)」・「川・池での遊び(周辺での活動を含む)」・「木登り」・「探検ごっこ」・「ドロ遊び」・「科学遊び」・「その他」の12項目とし、該当するもの全てを選ぶようにした。これらの質問項目の設定に際しては井上&無藤(2007)⁶⁾と河内ら(2011)⁹⁾を参考に、回収率を上げるためになるべく簡素化し、かつ実施されているNEAsをできるだけ漏れなく把握できるように具体例や注意書きを付記した。また、「科学遊び」とは、理科的な実験要素を含む無生物を使った遊びであることや販売されているものは含まないことを具体例とともに明記した。

3) 「その他」のNEAsの内容

前問で「その他」を選んだ回答者に対して、筆者らが想定しなかった「自然に関わる活動」の内容を把握するため、具体的な活動を入力する自由記述式の質問を設けた。

(4) 解析

NEAsの頻度の5個の選択肢およびNEAsの内容の12個の選択肢について、選択肢ごとに

保育者の属性によるカテゴリー分けをする前の全体の回答数を集計し、全回答者数に対する割合を算出した。

NEAs の頻度と保育者の各属性（年齢、立場、保育者歴、勤続年数）との関連について、多資料 χ^2 検定（石居 1975）¹⁰ を用いて解析した。ただし、検定におけるサンプル数の制約上、各属性において一部のカテゴリーを合一して行った。年齢については、20–24 歳と 25–29 歳をまとめて“20 代”（40 名）、30–34 歳と 35–39 歳をまとめて“30 代”（41 名）、40–44 歳と 45–49 歳をまとめて“40 代”（39 名）、50–54 歳・55–59 歳・60 歳以上をまとめて“50 代以上”（47 名）とした 4 カテゴリーを用いた。立場については、担任・副主任・フリーはそのままで、園長・主任・その他をまとめて“園長・主任・その他”（31 名）とした 4 カテゴリーを用いた。保育者歴については、5 年以上 10 年未満と 10 年以上 20 年未満はそのままで、1 年未満・1 年以上 3 年未満・3 年以上 5 年未満をまとめて“5 年未満”（26 名）、20 年以上 30 年未満と 30 年以上をまとめて“20 年以上”（49 名）とした 4 カテゴリーを用いた。勤続年数については、1 年未満と 5 年以上 10 年未満はそのままで、1 年以上 3 年未満と 3 年以上 5 年未満をまとめて“1 年以上 5 年未満”（54 名）、10 年以上 20 年未満・20 年以上 30 年未満・30 年以上をまとめて“10 年以上”（40 名）とした 4 カテゴリーを用いた。いずれの検定も有意水準は、 $> .05$ とした。

NEAs の各内容の実施割合と保育者の各属性（年齢、保育者歴、勤続年数）との関連について、多資料 χ^2 検定（石居 1975）¹⁰ を用いて解析した。保育者の立場は NEAs の内容に影響するとは考えにくいため除外した。また、検定におけるサンプル数の制約上、各属性において一部のカテゴリーを合一して行ったが、解析に用いた各属性のカテゴリーは、頻度での解析におけるものと全て同じカテゴリーであった。NEAs の内容に関するデータは複数回答のものであるため、各選択肢において選択肢を選んだ人数と選ばなかった人数に分けて集計し、選択肢ごとに保育者の各属性との関連について解析した。しかし、検定におけるサンプル数の制約上、動物の飼育・川・池での遊び・木登り・探検ごっこ・その他については解析しなかった。いずれの検定も有意水準は、 $> .05$ としたが、NEAs の内容と保育者の属性の検定においては多重比較となるため、Bonferroni の補正を行った。

「その他」の NEAs の内容について、自由記述の回答結果を基に、テキストデータを数量的に扱うことで内容分析を行うことができる計量テキスト分析（樋口 2014）¹¹ を行った。テキストデータの分析には、文章で同時に使用されることが多い語同士をエッジで結んで図示する計量テキスト分析手法（樋口 2014）¹¹ である共起ネットワーク分析を用いた。図示される語やエッジが過多であると語の分類や意味の正確な解釈が困難となる（樋口 2014）¹¹ ため、図示される語が 50 語内になるように出現頻度を調整するとともに、Jaccard 係数が 0.2 以上を示した語間の関連を分析対象とした。その結果、抽出された 181 語を対象に共起ネットワーク分析を行った。なお、出現回数が 2 回以上の語について解析した。

(5) 倫理的配慮

調査への協力は任意であり、協力しないことで不利益を被ることはないことなどを依頼文にて説明した。また、調査への返信を以って調査への同意を得ることとした。本研究は、近畿大学九州短期大学研究倫理委員会の審査・承認を得て実施された（承認番号第1番）。

3. 結果と考察

(1) NEAs の頻度

全回答者において、「週1回以上」自然に関わる活動をしていると答えた保育者が75名と最も多く、次に多いのが「1か月に数回」となり（54名）、自然に関わる活動を1か月に複数回実施している保育者が8割近くを占めた（表1）。一方、「数か月に1回」実施する保育者も32名と意外に多く、「年1回以下」と「まったくしない」保育者も3名ずつではあるが存在していた。東京都と神奈川県で調査した結果では、園単位ではあるが100%実施しているとなっており^{7), 8)}、保育者単位で見ると必ずしも全員が自然に関わる活動をしているわけではないことが示された。

表1. NEAs の頻度別回答者数とその割合 (%)

NEAs の頻度	N	%
週1回以上	75	44.9
1か月に数回程度	54	32.3
数か月に1回程度	32	19.2
年1回以下	3	1.8
まったくしない／したことがない	3	1.8

全回答者数 167 名

NEAs の頻度と保育者の各属性（年齢、立場、保育者歴、勤続年数）との関連については、いずれも有意な差は見られなかった（年齢：df=9、 $\chi^2_{cal}=11.42$ 、 $P<0.30$ 、図1／立場：df=9、 $\chi^2_{cal}=7.54$ 、 $P<0.70$ 、図2／保育者歴：df=9、 $\chi^2_{cal}=9.20$ 、 $P<0.50$ 、図3／勤続年数：df=9、 $\chi^2_{cal}=5.39$ 、 $P<0.80$ 、図4）。ただし、年齢については、30代の保育者で「週1回以上」の割合がやや低い傾向があり、30代と40代で「1か月に数回」と答えた保育者の割合がやや高い傾向がみられた。また、50代以上の保育者で「週1回以上」と答えた者の割合もやや高く、「年1回以下」と「まったくしない」と答えた保育者は40代の1名を除いて全て30代以下の保育者であった。したがって、有意な違いはないものの、年齢層の高い保育者の方がNEAsを高頻度で行う傾向があり、30代以下の保育者になるとあまり行わない者が少数出てくる傾向があった。

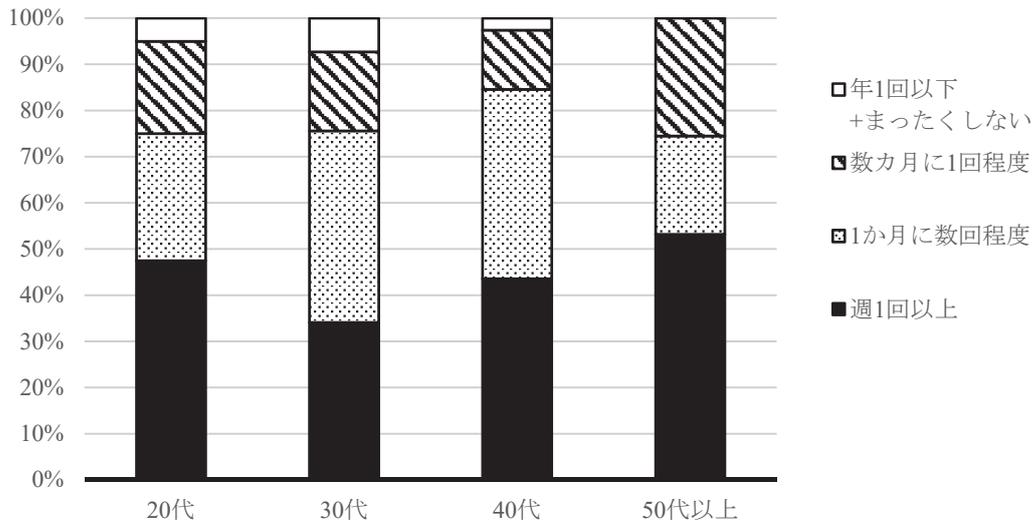


図1 保育者の年齢層別のNEAsの各頻度の割合

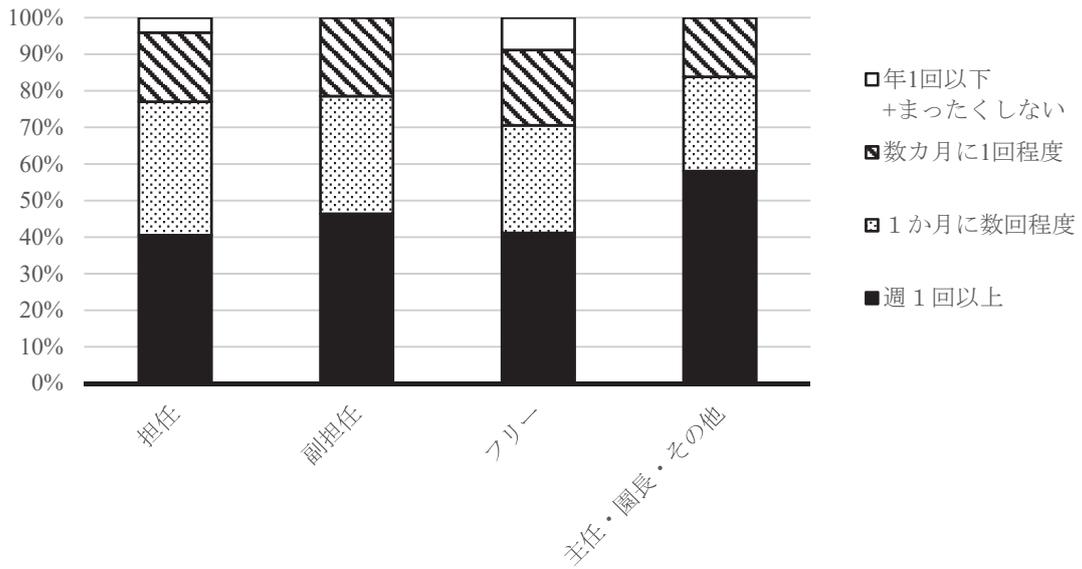


図2 保育者の立場別のNEAsの各頻度の割合

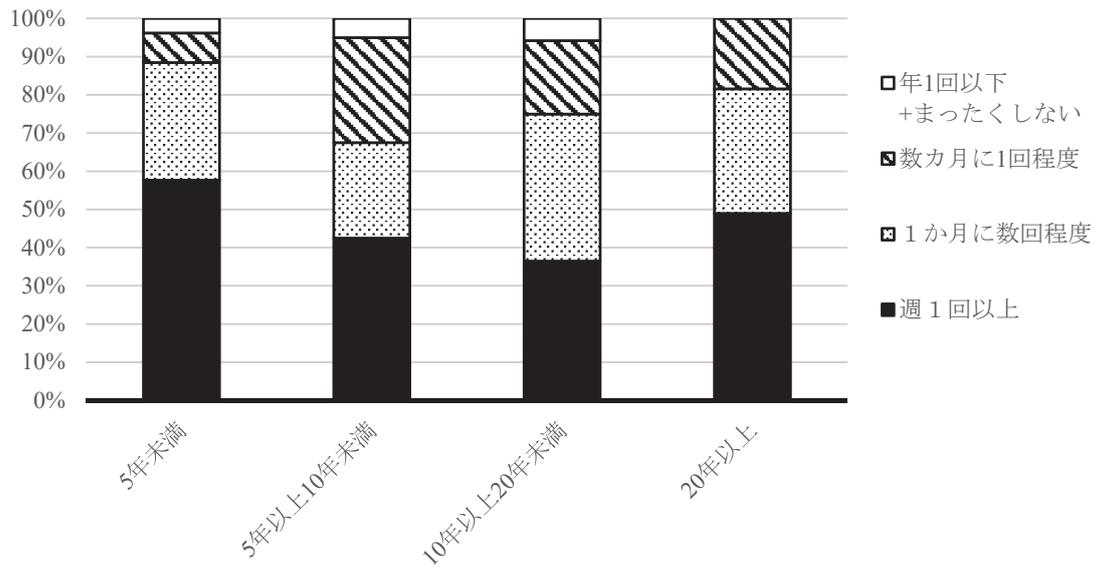


図3 保育者の保育者歴別のNEAsの各頻度の割合

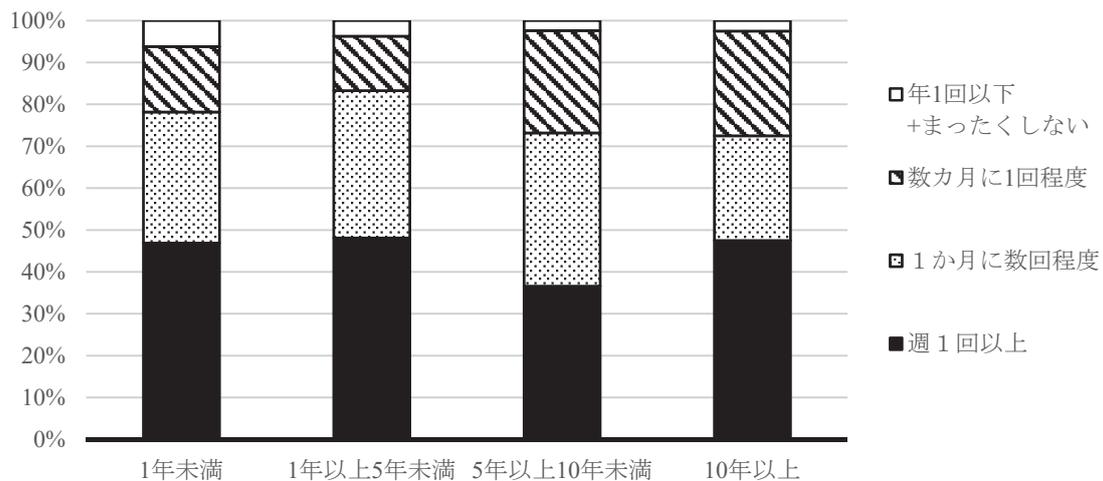


図4 保育者の勤続年数別のNEAsの各頻度の割合

(2) 実施しているNEAsの内容

「観察を伴う散歩」・「虫捕り」・「植物採集」・「植物の栽培」・「ドロ遊び」を行う保育者の割合が高く、「動物の飼育」・「川・池での遊び」・「木登り」・「探検ごっこ」を行っている保育者の割合は低かった(図5)。全体的にみると、生物に関わる活動が多く、無生物に関わる活動(ドロ遊びは除く)は少ない傾向があることが示された。この結果は、宮下&宮下(2010)⁷⁾および宮下&宮下(2011)⁸⁾での調査結果と同じ傾向である。一方、これらの先行研究では幼稚園の園外活動を除いて、化学領域の活動が30%~70%以上と高い割合であったのに対し、本研究での化学領域の活動にあたる「科学遊び」は約20%と低かつ

た(図5)。本研究ではNEAsを園内と園外に分けていないとはいえ、かなりの差があるが、この違いが地域によるものなのか、調査年によるものなのか、他に要因があるのか、現時点では不明である。また、生物に関わる活動であっても「動物の飼育」はあまり行われていない。井上&無藤(2009)¹²⁾の東京都および兵庫県での調査では、園単位での動物飼育の実施率は79.1%~100%と高く、保育者単位で集計した本研究での結果とは大きく異なる。一方、鳥限定ではあるが、高木(2014)¹³⁾は、園や保護者による飼育における感染症への懸念があることを示唆しており、2010年代後半以降の鳥インフルエンザやCOVID-19などの度重なる感染症の流行が影響しているのかもしれない。「川・池での遊び」を行っていたのはわずかに1名のみであったが、川や池、海における死亡事故がたびたび報道されていることから、川や池で遊ぶことの危険性が要因の1つとして考えられる。

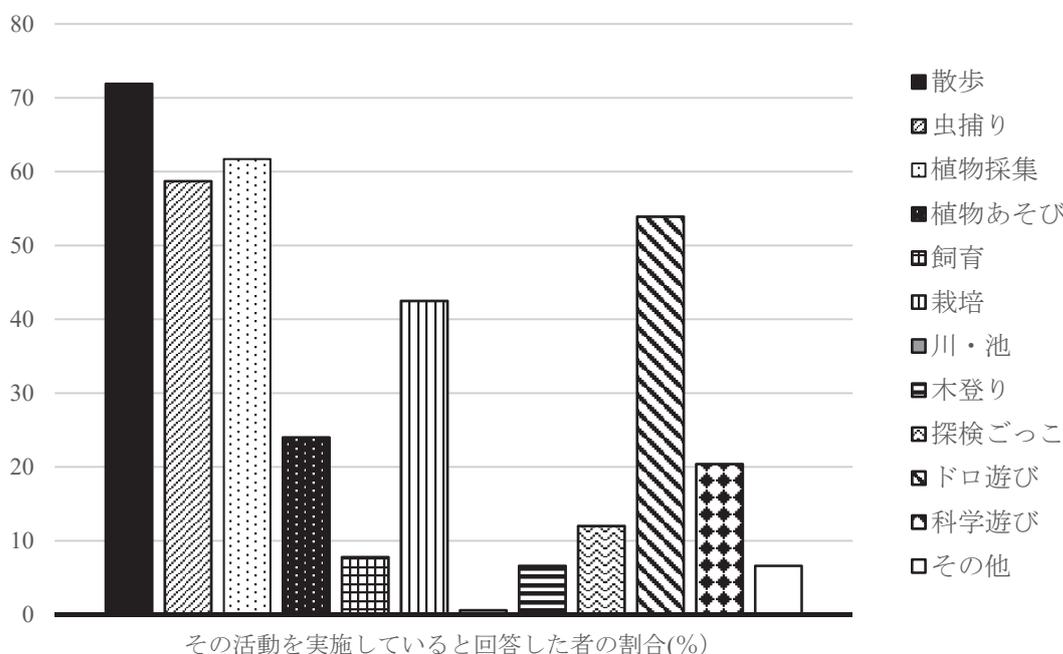


図5 全回答者に対して各活動を実施していると回答した保育者の割合

NEAsの各内容の実施割合と保育者の各属性(年齢、保育者歴、勤続年数)との関連については、「植物の栽培」・「ドロ遊び」と勤続年数の間を除き、有意な差は見られなかった(年齢:観察を伴う散歩、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=3.41$ 、 $P<0.50$ /虫捕り、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=2.18$ 、 $P<0.70$ /植物採集、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=0.54$ 、 $P<0.95$ /植物を利用した遊び、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=3.99$ 、 $P<0.30$ /植物の栽培、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=0.16$ 、 $P<0.99$ /ドロ遊び、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=1.12$ 、 $P<0.80$ /科学遊び、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=2.64$ 、 $P<0.50$;保育者歴:観察を伴う散歩、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=1.75$ 、 $P<0.70$ /虫捕り、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=3.43$ 、 $P<0.50$ /植物採集、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=2.33$ 、 $P<0.70$ /植物を利用した遊び、 $df=3$ 、 $\chi^2_{cal}=3.45$ 、 $P<0.50$ /植物の栽培、 $df=3$ 、 χ^2_{cal}

=3.44、 $P < 0.50$ / ドロ遊び、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 7.75$ 、 $P < 0.10$ / 科学遊び、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 3.52$ 、 $P < 0.50$; 勤続年数 : 観察を伴う散歩、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 0.11$ 、 $P > 0.99$ / 虫捕り、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 5.86$ 、 $P < 0.20$ / 植物採集、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 3.47$ 、 $P < 0.50$ / 植物を利用した遊び、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 1.86$ 、 $P < 0.70$ / 植物の栽培、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 11.39$ 、 $P < 0.01$ / ドロ遊び、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 14.75$ 、 $P < 0.01$ / 科学遊び、 $df = 3$ 、 $\chi^2_{cal} = 2.49$ 、 $P < 0.50$; 表 2) 。

表2. 保育者の各属性別にみた、それぞれのNEAを実施している者および実施していない者の内訳①

属性	カテゴリー	散歩		虫捕り		植物採集		植物遊び		栽培		ドロ遊び		科学遊び	
		○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×
年齢	20代	27	13	24	16	26	14	7	33	16	24	19	21	5	35
	30代	26	15	24	17	24	17	8	33	18	23	24	17	10	31
	40代	30	9	26	13	25	14	9	30	17	22	22	17	10	29
	50代以上	37	10	24	23	28	19	16	31	20	27	25	22	9	38
保育者歴	5年未満	19	7	13	13	15	11	4	22	10	16	8	18	3	23
	5年以上 10年未満	26	14	20	20	25	15	8	32	14	26	21	19	7	33
	10年以上 20年未満	37	15	33	19	36	16	12	40	21	31	33	19	10	42
	20年以上	38	11	32	17	27	22	16	33	26	23	28	21	14	35
	1年未満	23	9	14	18	18	14	7	25	6	26	9	23	4	28
勤続年数	1年以上 5年未満	39	15	30	24	35	19	10	44	25	29	27	27	11	43
	5年以上 10年未満	30	11	29	12	29	12	12	29	17	24	29	12	8	33
	10年以上	28	12	25	15	21	19	11	29	23	17	25	15	11	29

○：その活動を実施している、×：その活動を実施していない

「植物の栽培」および「ドロ遊び」を実施している保育者において、いずれも勤続年数が1年未満の保育者での実施割合が低かった。また、「植物の栽培」では勤続年数10年以上、「ドロ遊び」では勤続年数5年以上10年未満の保育者で実施割合が高かった。「ドロ遊び」については、有意な違いではないが保育者歴が5年未満の者で実施割合が低く、10年以上20年未満者で実施割合が高い傾向もみられた。以上のことから、園での栽培に適した植物種や栽培場所、ドロ遊びに適した土やその場所といった、ある程度の経験と園周辺を含む園の環境に熟知していることが「植物の栽培」や「ドロ遊び」の実施に関わっている可能性がある。「植物を利用した遊び」では、有意ではなかったが他の活動と比べると、年齢が50代以上の保育者で実施している割合が高い傾向があった。「植物を利用した遊び」は本やネットから遊び方や遊べる植物の種類の情報が見られるが、幼少期に実際に遊んだ経験がある方が実施しやすいことが考えられる。若い世代の保育者では、植物を利用した遊びを経験したことがない者が増えているのかもしれない。「科学遊び」を実施している保育者の割合は低く、約20%であった。有意な違いはなかったが、保育者歴が5年以上の保育者の方が5年未満の保育者より実施している割合が高く、実施には経験が必要であることが予想される。検定におけるサンプル数の制約のため解析を行っていないが、「木登り」と「探検ごっこ」を実施している保育者は40代以下で多い傾向があり、かつ保育者歴が5年以上の保育者が多い傾向があった(表3)。どちらの活動も体力が必要とされるので、ある程度の年齢以上になると実施しにくいと思われる。また、木登りに適した木の選定や探検ができる場所といった情報も必要であることから保育者歴が短いと実施しづらい可能性がある。

表3. 保育者の各属性別にみた、それぞれのNEAを実施している者および実施していない者の内訳②

属性	カテゴリー	飼育		木登り		探検ごっこ	
		○	×	○	×	○	×
年齢	20代	4	36	3	37	7	33
	30代	5	36	4	37	7	34
	40代	2	37	4	35	2	37
	50代以上	2	45	0	47	4	43
保育者歴	5年未満	1	25	1	25	2	24
	5年以上10年未満	4	36	2	38	6	34
	10年以上20年未満	5	47	6	46	8	44
	20年以上	3	46	2	47	4	45
勤続年数	1年未満	2	30	0	32	0	32
	1年以上5年未満	3	51	3	51	6	48
	5年以上10年未満	5	36	3	38	7	34

	10年以上	3	37	5	35	7	33
--	-------	---	----	---	----	---	----

○：その活動を実施している、×：その活動を実施していない

「川・池での遊び」と「その他」はサンプル数が少ないので省略

(3) 「その他」のNEAsの内容

分析結果を図6に示した。共起ネットワークから、調査者が想定していなかった自然に関わる活動を4つに分類することができた。第一に、「植える」・「周り」から構成されるグループである。子どもの周りで植物等を植える活動を行っていることが推察され、「植物を植える活動」と解釈した。第二に、「虫」・「散歩」・「探す」・「田んぼ」・「覗く」から構成されるグループである。散歩で田んぼに行き、そこで虫を観察する活動を行っていることが推察され、「園外での虫の観察」と解釈した。第三に、「園」・「庭」・「畑」・「世話」・「子ども」・「お世話」・「食物」・「植物」から構成されるグループである。園の庭など、子どもから距離の近い場所で、食べることができる植物の世話をしていることが推察され、「園庭での食用植物の世話」と解釈した。第四に、「焼き芋」・「落ち葉」・「使う」から構成されるグループである。落ち葉を使った焼き芋の活動を行っていることが推察され、「落ち葉を使った焼き芋」と解釈した。これらの活動の中には12項目の活動と共通する部分も含まれるが、NEAsを筆者らの想定より複合的に捉えている保育者がいることを示唆している。本研究ではNEAsの内容として定型的な活動を選択肢として用いたが、NEAsの内容に関する回答を全て自由記述式に変えて調査し、共起ネットワーク分析を行うことで、より詳細に、かつより現実に即した保育現場でのNEAsの実態について知ることができるかもしれない。

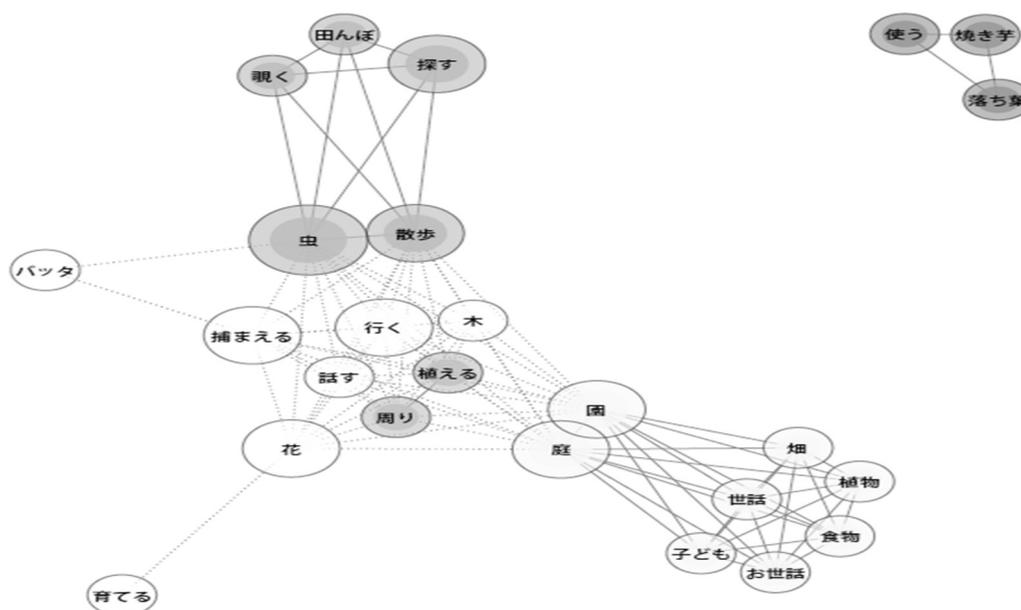


図6 「その他」のNEAsに関する共起ネットワーク

4. まとめ

先行研究^{7)・8)}と本研究の間には、生物に関わる活動とドロ遊びの割合が高いという共通点があった一方、NEAsを「まったくしない」と回答した保育者がわずかながら存在する。「科学遊び」のような化学領域の活動の割合が低いといった違いも見られた。以上のことから、園単位だけでなく保育者単位での調査をより多くの地域で行い、より詳細なNEAsの実施実態を把握するとともに、都市部と地方の間の違いや各地域の特色を明らかにすることが今後の課題となろう。

林・柳井(2000)¹⁴⁾および林・奥村(2003)¹⁵⁾は、散歩の回数を重ねることで子ども達の行動や発言に発展がみられたことを報告している。本研究でみられた保育者間のNEAsの頻度や内容の違いが、各保育者が担当するクラスの子どもの成長・発達に影響するのかわかを調べるのが、今後のもう1つの課題である。

付記

調査にご協力いただいた園および各園の保育者の先生方に感謝いたします。なお、本研究は、JSPS 科研費 JP20K02672(研究代表者：堀田亮)の助成を受け実施された調査をもとに行われました。

5. 参考文献

- (1) 井上美智子(2000)「日本の公的な保育史における「自然とのかかわり」のとらえ方について：環境教育の視点から」『環境教育』第9巻2号 2-11頁
- (2) 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2017)『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド本社
- (3) 文部科学省生涯学習審議会(1999)「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむー「青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」ー」
https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_gakushu_index/toushin/1315211.htm
- (4) 山本裕之・平野吉直・内田幸一(2005)「幼児期に豊富な自然体験をした児童に関する研究」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第5号 69-80頁
- (5) 金子仁(2015)「自然体験活動が育む幼児の生きる力の育成ー森の幼稚園での活動を通して学ぶことー」『育英短期大学幼児教育研究所紀要』第13号 23-31頁
- (6) 井上美智子・無藤隆(2007)「幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態」『教育福祉研究』第33号 1-9頁
- (7) 宮下治・宮下彰(2010)「幼稚園における自然体験学習の現状と課題に関する研究ー東京都と神奈川県の実験結果を踏まえてー」『関東学院大学人間環境学会紀要』第14号 73-88頁

- (8) 宮下治・宮下彰 (2011) 「保育所における自然体験学習の現状と課題に関する研究―東京都と神奈川県の実践結果を踏まえて―」『関東学院大学人間環境学会紀要』第 15 号 93 - 108 頁
- (9) 河内勇樹・嶽山洋志・美濃伸之 (2011) 「幼稚園および保育所における五感を通じた自然体験の現状」『ランドスケープ研究』第 74 巻 5 号 647 - 650 頁
- (10) 石居進 (1975) 『生物統計学入門』培風館
- (11) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシヤ出版
- (12) 井上美智子・無藤隆 (2009) 「幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 (2)―動物飼育の実態―」『教育福祉研究』第 35 号 1 - 7 頁
- (13) 高木義栄 (2014) 「保育現場における野鳥とかかわる活動への取り組みと意識」『近畿大学九州短期大学研究紀要』第 44 号 63 - 73 頁
- (14) 林幸治・柳井直美 (2000) 「子供の身近な自然とのかかわりに関する実践的研究」『近畿大学九州短期大学研究紀要』第 30 号 167 - 174 頁
- (15) 林幸治・奥村千鶴 (2003) 「子供の身近な自然とのかかわりに関する実践的研究 (その 2)」『近畿大学九州短期大学研究紀要』第 33 号 71 - 83 頁